

岩手医科大学歯学会教育講演会抄録

日時：平成18年3月28日（火）午後6時30分より

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室

“The fate of the marginal bone-a biological or biomechanical issue”

Dr. Stig Hansson Ph.D (Executive of Astra tech AB, Sweden)

ー スウェーデン, ノーベルファーマ社, チーフ・エンジニア (1982~1985)
ー スウェーデン, アストラテック社,
シニア・サイエンティフィック・エグゼクティブ (2002~)

細胞レベルから器官レベルにおける多くの生物学的な事象は、機械的な刺激によって引き起こされる。骨は、最小限のボリュームを確保することで、要求される強度を保とうとする。ここで重要なのは、加重負担のない骨は吸収傾向にあるということである。また加重負担が過度の場合も、骨は吸収傾向を示す。この知識が、デンタル・インプラントのデザインにおいて、二つの基準を確立した。この基準に準拠してデザインされたインプラントを使用すると、インプラント辺縁骨の予後が改善されると予想されている。骨内におけるインプラントの維持強さはインプラント表面の粗さによって増大する。この表面の微細構造の最適化により、インプラントの維持強さを最大にすることができる。また、インプラント表面の粗さは、顕微鏡レベルでの骨に対する有益な機械的刺激をも引き起こす。動物実験においては、インプラント表面のフッ素化により維持強さの更なる増大が明らかにされた。

“Bone grafting techniques for maxillary implants”

Prof. Karl-Erik Kahnberg D.D.S, Ph.D

(Dept. of Oral and Maxillofacial Surgery, Faculty of Odontology, The Shalgrenslen Academy at Goeteborg University, Goeteborg, Sweden)

ー イェテボリ大学顎顔面外科学講座助教授 (1979)
ー ウメア大学顎顔面外科学講座教授 (1986)
ー イェテボリ大学顎顔面外科学講座教授 (1995)

理想的とは言えない上顎骨の患者に対して、骨量を増大させる処置が必要とされることが多い。上顎骨の顕著な骨吸収により、ほとんど骨のボリュームが残されていない場合、オンレー又はインレー・グラフトが行われる。下顎骨と上顎骨の間に前後方向のずれが認められる場合は、オステオトミーが推奨される。欠損歯を伴う上顎洞底骨の非薄化症例においては、上顎洞底の挙上を選択肢となる。通常は、骨量の回復のための第1期と、インプラント埋入のための第2期に分けた、2回法が行われる。その際、必要とする骨量によって、移植骨の採取部位が決定される。採取部位としては、腸骨、下顎骨、腓骨が適している。上顎臼歯部における骨量の減少を伴う単独歯欠損症例においては、1回法による局所的な上顎洞底の挙上が行われる。上顎骨のボリュームが減少した場合、サイナス・インパクションは有用な選択肢となる。多彩な手術技法により、どのような骨の状況であっても、ほとんど全ての症例においてのインプラント治療が可能となった。本講演では、各種の手術技法を供覧すると同時に、長期的な予後についても報告したい。